

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

なし

---

(発行年 / Year)

1910

第二編 物權

本編ハ既成法典財産編第一節ニ掲クル主タル物權及ヒ債權担保偏ニ掲クル從タル物權ニ關スル規定ヲ併合スルモノニシテ持シ既成法典ノ修正レタル點ハ利益權使用權居住權及ヒ債權ヲ刪除シタルニ在リ又物權ニ關スル特別ノ取得方法ニシテ既成法典財産取得偏ニ規定スル所ノ條項ハ必要ニ應シ之ヲ摘出シテ本編ニ編入セリ

本編ノ物權トハ財産權ニシテ物ノ上ニ行ハレ總テ人ニ對抗スルコトヲ得ル權利ヲ云フ故ニ生命身體榮譽自由等ニ關スル權利ノ如キハ之ヲ包含セズ蓋此等ノ權利ハ不法ノ

法典調查會

行為不正ノ損害等ニ關スル規定ニ依リテ間接ニ保護ヲ受クベレト雖モ之ヲ一種ノ物權トシテ直接ニ保護スルコトハ本案ノ採ラザル所ナリ故ニ本案ニ謂フ所ノ物權ハ狹義ノ意味ニ於テ財産ニ關スル權利ニ限ルモノトス

第一章 總則

本章ハ物權全体ニ適用スル規則ヲ掲クルモノニシテ物權ノ創設得喪ニ關スル規定ノ如キハ總テノ物權ニ適用スルハキヲ以テ茲ニ之ヲ纏括シテ記載セリ既成法典ハ合意ノ結果トシテ物權ノ得喪移轉ニ關スル規定ヲ財産編第二百九十六條第三百三十一條第三百四十

ハ條等ニ揚クト雖モ之レ固ヨリ物權ノ通則ト認ムハキモナレハ本案ハ此等ノ條項ヲ<sup>取</sup>出シテ以テ物權ノ總則ヲ定メタリ

第七十六條

抑モ物權ハ總テノ人ニ對抗スルコトヲ得ル強力ノ權利ナルヲ以テ若シ各目カ隨意ニ之ヲ創設シ得トスルトキハ公益ニ及スル弊害ヲ生スルコト固ヨリ論ヲ俟タズ之レ本案ハ總則ノ主條ニ於テ物權ハ法律ニ定ムルモノ外之ヲ創設スルコトヲ得ズト規定シ其種類ヲ限定スルコトヲ明<sup>カ</sup>シタル所以ナリ故ニ本條ハ其裏面ニ於テ第一ニ物權ハ人意ニテ創設シ得ズ

法典調査會

ルコト第二ニ物權ハ慣習ニ依リテ成立シ得ザルコトヲ示シ第三ニ諸國ノ法典并ニ學說上ニ存スル疑義ノ一點即チ贅權留置權先取特權ノ如キハ人権ナルカ<sup>ハ</sup>特ク物權<sup>ノ</sup>カノ疑問ヲ決定シテ此等ノ權利ハ本<sup>法</sup>條ニ依リテ物權タルコトヲ示セリ

本條ニ於テ本法其他ノ法律ト云フ所以ハ物權ノ創設ハ主トシテ本法ノ規定ニ依リコトヲ示スト共ニ著述者ノ權技術者ノ權ノ如キ本法以外ノ法律ニ依リテ創設セラハル權利アルコトヲ示スノ意ニ出タリ又本案ハ既成法典財產編第二條ノ如ク物權ノ種類ヲ列擧セサルハ<sup>今</sup>法條ニ依リテ

其必要ナキニシテ

物權ヲ創設スルコト<sup>得ル</sup>妨ケサルヲ爲シレテ  
独占民法第一草案ノ如ク處分權ナキ所有  
權ノ意思ニ因リテ創設スルコトヲ得ヤト  
規定レ裏面ヨリ物權ノ隨意創設ヲ禁ズル  
方法ヲ取テガリレハ<sup>所</sup>之レ立法ノ主義ニ付  
キ明ラナラザル<sup>虞</sup>アレハナリ

第百七十七條

物權ハ單ニ當事者ノ意思ニ因リテ設定レ  
又ハ之ヲ移轉シ得ルカ將々目的物ノ引渡  
ヲ要スルカニ付キ立法主義ハ二派ニ分レ  
後ニ實際上大ニ利害ノ關係ヲ有スル疑義  
ノ存スルヲ見ル而シテ本條ハ既成法典財  
産編第百九十六條及ヒ第三百三十一條

法典調査會

ノ主義ニ依リ<sup>具</sup>護<sup>テ</sup>タル規定ニキテ多數  
ノ立活例ニ依<sup>テ</sup>ル當事者ノ意思ヲ重シ其  
意思ノ<sup>レ</sup>因リテ物權ヲ設定シ又ハ之ヲ  
移轉シ得ルコトヲ認ムルモノナリ蓋物權  
ノ設定又ハ移轉ニ付キ物ノ引渡ヲ要スル  
ハ訟擾方法ノ未タ充分行ハレザル<sup>法律</sup>  
狀況ニ於テ又取引ノ頻繁ナラザル<sup>場合</sup>  
於テ行ハルヘキ規定ナリト雖<sup>モ</sup>既ニ我國  
今日ノ狀況ニ取リテハ從ニ取引ノ不便ヲ  
與フルニ過キサレハ<sup>ガ</sup>然レ<sup>レ</sup>法律ノ規  
定權利ノ性質等ニ因リテ當事者ノ意思ノ  
<sup>レ</sup>因リテ物權ヲ設定シ又ハ之ヲ移轉シ  
得ザルコトナルヲ以テ本條ハ<sup>或</sup>場合ニ於

テ例外ノ存スルコトヲ示セリ

第百七十八條

本條ハ第百七十七條ノ例外トモ稱スベキ  
 規定ニシテ第百七十七條ノ規定ニ依レハ  
 物權ハ當事者ノ意思ノシテ因リテ設定又  
 ハ移轉スルコトヲ得<sup>ル</sup>第三者ニ對シテ  
 之其効力ヲ主張シ得<sup>ル</sup>ト雖モ若シ此京  
 則テ絶對的ニ適用スルトキハ第三者ハ為  
 ノニ不測ノ損害ヲ蒙リ取引上種々ノ弊害  
 ヲ生スル虞<sup>ハ</sup>故ニ本案ハ不動産ニ關ス  
 ル物權ノ得喪及ビ變更ニ付テハ特ニ本條  
 ノ規定ニ依リテ第百七十七條ノ原則ヲ制  
 限スルモノ、レシテ物權ハ當事者ノ意思ノ

法典調査會

ニ因リテ設定又ハ移轉スルコトヲ得ト  
 雖モ之ヲ以テ第三者ニ對抗シ<sup>其効力ヲ主</sup>不<sup>利</sup>  
 益<sup>ヲ</sup>被<sup>ル</sup>又ハコトヲ得<sup>ズ</sup>ト考セリ然レ  
 此一旦登記法ノ規定ニ從ヒ公示ノ手續ヲ  
 盡シタル以上ハ第三者ハ善意タルハ惡意  
 タルトトヲ問ハス總<sup>テ</sup>以テ有效ニ對抗  
 スルコトヲ得<sup>ル</sup>蓋登記法ノ主旨ニ違フコト  
<sup>分カラレシメタリ</sup>

第百七十九條

本條モ第百七十七條ノ原則ニ對スル例外  
 トモ稱スベキ規定ニシテ第百七十八條ト  
 同一ノ趣旨ニ本ツキ動産ニ關スル物權讓  
 渡ノ場合ニ於テ公益上ノ必要ニ因<sup>リ</sup>規  
 定<sup>ス</sup>トスル既成法典第百四十六條

本条ノ推利ハ既例ニ同ク物權ノ消滅ニ由リテ通例ノ規定ニモノミテ  
 既成出典ノ存続ニ付テハ十九條ノ規定ニ依リテ本条ノ旨ニ至テモ其ノ效力  
 ヲ改メトモモ之ニ固ク地役ノ限ニキテノミテ所有權及ク占有權以外  
 ノ物權ニ付テハ一般ニ適用スルコトヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ本條ニテ  
 本條總則ノ中ニ掲ケタリ蓋シ所有權ハ物權中最廣ク權利ニ  
 シテ總テ他ノ物權ヲ包含スルモノナリ且チ一物ニ付テハ所有權ト他  
 物權ト同一ノ限ニ止リテ特ニ所有權以外ノ物權ノ存続ヲ認ムル  
 必要ナク又揮發上ノ其存立ヲ是認スルニ由ルニモノレ故ニ本條  
 才一段ノ本文ニ此ノ如キ場合ニ於テ所有權以外ノ物權ノ消滅ニ付  
 与テ效力ニ至ラズモ之ニ當然ノ相又ラ要セザル事決ニ屬シ本條ノ如ク  
 本條但書ノ例外ニ至ラズ實際ノ必要ニ至ラズ即チ本條適用  
 ニ依リテ所有權ノ限固クタル物權ハ總テ場合ニ於テ純然ノ

法典調查會

消滅ニ至ルレキハ其物權ニ付テ又且物ニ付テ推利ヲ有スルモノナ  
 意外ノ揮發ヲ認ムルコトヲ固ク疑フコトヲ本條ノ才三番ノ保護  
 ニ必要ナラズ本條但書ニ依リテ通例ノ適用ヲ制限スル  
 本條才二段ハ才一段ノ其旨存立ヲ屬シテ所有權以外ノ物權ヲ目的  
 トスル權利ト所有權ト限固ク同ク他ノ物權ノ所有權ノ包含ニ  
 之ヲカケテ其存立ヲ以テモノトモ之ニ効力及ビ其存立ノ限  
 又才三番ノ保護ニ必要ナラズ且チ一才二段ノ場合ニ於テ才一  
 段ノ規定ヲ適用スルコトヲ容ナカリ

其他本條才二段ノ規定ニ依リテ占有權ニ付テモ一種ノ物權トスルモノナ  
 本條才二段ノ規定ニ依リテ占有權ノ存続ニ付テモ之ニ所有權ノ其  
 性質上他ノ物權ノ比ニテ權利ノ保護ニ付テモ之ニ依リテ所有權ト  
 同キ本條才二段ノ規定ニ依リテ占有權ノ存続ニ付テモ之ニ所有權  
 三條ノ占有權ニ付テモ之ニ依リテ物權ノ消滅ニ至ラズ即チ本條ノ旨ニ至

ラ明ニトシナリ

ハ本條ト同一ノ主義ニ出ツト雖モ其適用  
ヲ特別ノ場合ニ限ル本條ノ廣ク動産ニ關  
スル物權讓渡ノ場合ヲ包含セリ又同條第  
二項ハ無記名証券ニモ第一項ノ規定ヲ適  
用スベキコトヲ示スル雖モ之レ或ハ債權  
讓渡ノ規定ニ屬スベキモノニシテ物權ノ  
總則ニ掲クルハ不適當ト認めルヲ以テ刪  
除セリ

物件引渡ノ效力ニ付テモ之ヲ以テ或ハ權  
利移轉ノ要件トシ或ハ單ニ公示ノ方法ト  
ス本條ハ既ニ第百七十七條ノ原則ニ依リテ  
當事者ノ意思ノミニ因リテ有効ニ物權ヲ  
設定又ハ移轉ニ得ルコトヲ認めルモノナ

法典調査會

レハ本條ニ於ケル引渡ハ單ニ公示ノ方法  
証明ノ方法タルニ過キサルノニ故物權引渡  
ナキトキハ物權ノ讓渡ノ第三者ニ對抗レ  
テ利益ヲ被ルルコトヲ得ザルモノ  
トス

第二章 占有權

占有ハ事實ナリヤ將テ權利ナルヤハ此ニ説  
明ヲ要セズ本條ハ立法上占有ヲ以テ物權ノ  
一トシ之ニ法律ノ保護ヲ與フルモノニシテ  
従ハ占有ノ規定ハ法典中如何ナル位置ヲ占  
ムベキヤニ付テハ立法上ノ見解區別スルニ  
拘ラズ本條ハ既ニ法典其他多數ノ立法例ニ  
倣フテ之ヲ物權編ニ規定スト雖モ既ニ法典

ノ編纂法ニ及シテ之ヲ本編ノ主位ニ置キタルハ占有ノ事實ハ殆ント總テノ物權ノ基礎ヲ爲スモノニシテ占有ノ保護アリテ始メテ他ノ物權ニ完全ナル保護ヲ得バケレハナリ本章ノ規定ハ之ヲ三節ニ分チ第一節ハ占有權ノ取得ニ關シ第二節ハ其效力ニ關シ第三節ハ其消滅ヲ規定シ順次既成法典ニ修訂ヲ加ヘタリ

### 第一節 占有權ノ取得

本節ハ占有權ノ取得ニ關スル規定ヲ掲グルモノニシテ特ニ說明ヲ要セザルヲ以テ此ニ既成法典ノ條項ヲ刪除セシ理由ヲ述バルニ止メン

### 法典調査會

既成法典ハ占有ノ種類及ヒ取得スルコトヲ得ベキ物ニ關シテ特ニ一節ヲ設クト雖モ其條項ハ概シテ不必要ノ規定ニ屬ス即チ第百七十九條ノ占有ノ區別ハ學理上真心<sup>善意</sup>要<sup>必要</sup>ルベシト雖モ立法上ハ然リ規定<sup>其</sup>必要ナシト認ムルニ因リ之ニ關連セル第百八十條ト共ニ<sup>逐</sup>刪除セリ第百八十一條ニ掲グル所ノ正權原及ヒ無權原ノ占有ノ區別ハ不用ニ非ズト雖モ本章ハ他ノ條項ニ依リテ自ラ之ヲ明ナラセムルヲ以テ之レカ爲メニ特ニ一條ヲ規定スル必要ナシト認メタリ次ニ第百八十二條ニ掲グル所ノ善意及ヒ惡意ノ占有ノ區別<sup>佔領</sup>ハ保護ノ點ニ



於テ其程度ヲ異ニスルヲ以テ其必要アリ  
ト雖モ茲ニ謂フ所ノ善意及ヒ惡意モ他ノ  
場合ニ於ケル善意及ヒ惡意ト同一ナルヲ  
以テ占有ニ付テ特ニ之ヲ規定スルニ及ハ  
ザルヘシ又瑕疵占有ニ關スル第百八十三  
條ノ規定ニ保護ヲ異ニスル点ニ於テ不  
要八條文ニ非ズト雖モ同條ノ如ク瑕疵ノ  
意義ヲ狭ク解釈スルハ却テ不當ナリト云  
ハザルベカラズ其他第百八十四條ノ自然  
ノ占有ニ關スル規定ハ固ヨリ無用ノ條文  
ニ過ギス此等ノ理由ニ因リテ本案ハ既成  
法典財産編第四章第一節ノ規定ハ概シ之  
ヲ刪除ロリ

法典調査會

第百八十一條

本條ハ占有權取得ノ原則ヲ定ムルト同時  
ニ占有權ノ性質ヲ説明スルモノコレ既  
成法典第百八十九條ヲ修正セリ既成法典  
ハ占有ノ目的物ハ有体物タルト權利タル  
トヲ區別セズ又占有ヲ三級ニ分ケ真正ノ  
占有ハ心素トシテ所有ノ意思ヲ要ストセ  
リ本案ハ此ニ點ニ於テ及對ノ主義ヲ採ル  
モノコレテ占有權ノ目的物ハ原則トシテ  
有体物ニ限り權利ヲ目的トスル場合ハ之  
ニ準スルモノトシ又心素ハ自己ノ所有ト  
為ス意思ヲ要ロズレテ單ニ自己ノ為メニ  
スル意思アルヲ以テ是レリトス之レ一ハ

本案ハ占有ヲ以テ一ノ物權ト爲シタルニ  
因リ又一ハ占有者カ自己ノ利益ノ爲シニ  
或物ヲ占有スル以上ハ法令之ヲ所有スル  
意志ナキモ公益上既ニ法律ノ保護ヲ與フ  
ハキ必要アリト認ムレハナリ其他既成法  
典ニハ目的物ヲ握取スル所爲ニ因リテ占  
有ヲ取得ストシテ體力ヲ以テ直接ニ目  
的物ヲ掌握スルコトヲ要スルカノ疑ヲ起  
サレムルヲ以テ本案ハ所持ナル文字ヲ用  
ヒ目的物ハ自己ノ力ノ範圍内ニ在レハ占  
有<sup>有義</sup>取得シ得ルコトヲ明ニセリ

第百八十二條

本條ハ代理人ニ依リテ占有權ヲ取得スル

法典調查會

場合ヲ規定スルモノニシテ既成法典財產  
編第百九十條ト其意義ヲ一ニス抑モ權利  
ハ代理人ニ依リテ之ヲ取得シ得ルコト更  
ニ疑ナキヲ以テ獨リ占有權ニ付テ如此規  
定ヲ設クル必要ナキカ如シト雖モ占有權  
ナルモノハ本表事實ニ本ツクモノニシテ  
法律ノ保護ヲ受クルニハ自己ノ爲メニ  
ル意思ノ外必ズ目的物ヲ所持スルコトヲ  
要スルモノナレハ事實上他人カ之ヲ所持  
スルニ於テハ法律ノ保護ヲ與フルニ足ラ  
ズトシ或ハ占有保護ヲ以テ人身保護ノ一  
部トシ爲メニ占有ニハ代理ヲ許サズトシ  
見解ヲ取ル者少カラサルニ因リ諸國ノ法

典ニ占有ハ自己又ハ代理人ニ依リテ之ヲ  
取得シ得ルコトヲ明示シ既成法典モ之レ  
カ為ノニ持ニ一條ヲ設ケテ其題ナカラシ  
メタリ本案モ亦々其必要アリト信スルヲ  
以テ既成法典ノ如ク本條第一項ノ規定ヲ  
設ケタリ

法定代理人ニ依リテ占有権ヲ取得スル場  
合ニ於テハ本人ハ目的物ノ所持ハ勿論自  
有ノ意思ヲ有セサルコトアリ或ハ意思能  
力ナキコトアリ此斯場合ニ於テ法律ノ保  
護ヲ與フヘキヤ否ヤニ付テハ一層疑惑ヲ  
生スル虞アルヘシ故ニ本案ハ本條第二項  
ヲ設ケテ法定代理人ハ其意思ヲ以テ本人  
ノ意思ヲ補充シ之ニ依リテ本人ハ占有権  
ヲ取得シ得ルコトヲ明示セリ然レモ本條  
ノ規定ハ固ヨリ本人ハ獨立シテ占有権ヲ  
取得スルコトヲ妨ケサルモノニシテ意思  
能力ナキ者ハ代理人ニ依リテ取得スルノ  
外ナシト雖モ意思能力ヲ制限セラレタル  
者ハ既ニ自ラ占有権ヲ取得シ得ルコト別  
ニ題ナカルヘシ

法典調査會

第百八十三條

本案ハ占有ヲ以テ一ノ物權トシ他ノ權利  
ノ如ク讓渡シ又ハ相續シ得ルコトヲ認ム  
ルモノナレハ占有権ノ性質上其讓渡ニ關  
シ持ニ本條ヲ設ケテ

其方法ヲ規定スル必要ヲ生シタリ即チ台  
有權ニハ自己ノ為メニスル意思ノ外目的  
物ヲ所持スルヲ要スルヲ以テ本條ニ於テ  
其讓渡ノ方法モ亦タ物ノ引渡ニ依ラサル  
ヘカラスナルフト示セリ若シ本條ノ規定  
ナキトキハ物權ノ設定又ハ移轉ニ關スル通  
則ニ從ヒ單ニ當事者ノ意思ノ以テ因リテ  
台有權ヲ讓渡シ得ヘシト語辭ヲ生スル意  
カシテ本條第一項ノ規定ノ如キハ第百  
七十七條ノ謂フ所ノ別段ノ定ニ屬スルモ  
ノニシテ同條ノ規定スル通則ニ對シテ一  
種ノ例外ヲ定ムルモノナリ

法典調査會

讓渡シ得ルコトヲ定ムルモノニシテ第一  
項ニ對シテハ爰則ナリト雖モ第百七十七  
條ノ規定ヨリ見ルトキハ寧ロ通則ニ復ス  
ルモノナリ亦項ハ既成法典財產編第百九  
十一條第一項乃至第三項ノ規定ヲ援據シ  
タルモノニシテ簡易ノ引渡及ヒ在在有改定  
ノ場合ヲ包含セリ又同條第四項ハ權利ノ  
行使ニ關スル規定ニシテ本條ハ別條ニ於  
テ規定スルヲ以テ此ニ之ヲ省ケリ

第百八十四條

本條ハ既成法典財產編第百九十一條第三  
項ニ掲タル所ニ在在有改定ノ場合ニ規定ス  
ルモノニシテ前條第二項ノ適用ノ一ナリ

第一百八十五條

而こヲ持ニ本条ヲ設ケル所以ハ代理人カ  
本人ニ代リテ自己ノ有レシ台有物ヲ尔後  
本人ノ為メニ台有スルコトヲ禁スル理由  
ナキニ拘ラヌ第百〇九条ノ規定ニ依ルト  
キハ代理人ハ本人ニ代リテ自己ト法律行  
為ヲ為スコトヲ得ナルヲ以テ然レ本条  
明文ナキトキハ代理人ノ有ル台有権ハ  
台有改定ニ因リテ本人之ヲ執術シ得サル  
結果ヲ生スルノイナラヌ本条ノ規定スル  
所ハ前条第二項ヨリ推知シ難レハナリ

法典調査會

ルコトニ決セリ即チ通常ノ台有改定ノ場  
合ニ於ケルヨリニ對シテ一人ノ増加シ後  
ヲ法律關係ハ一層複雑ト爲リタル場合ヲ  
規定スルモノナリニシテ  
蓋通常ノ台有改定ノ場合ニ於テハ前主ハ  
後主ノ代理人トナリテ目的物ヲ台有スル  
モノナレハ本条ノ場合ニ於ケル代理人ハ  
第百〇五条第一節ノ規定ニ依リテ第三節  
ノ複代人ト爲ルモノナリ然レハ第三節ハ  
此複代人ニ依リテ目的物ヲ所持シ得ヘク  
前主ニ對シテ台有ノ意思ヲ表示シ複代人  
ニ依ル所持ヲ承認シタルトキハ之ニ因リ  
テ台有権ヲ取得シ得クキヤ明ナリ然レハ

前

此場合ニ於テハ實際ニ多クハ舊主ノ代理人ハ第三者ノ複代人ト為ラズシテ直ニ其代理人ト為ルニ等シト雖モ代理人ト第三者トノ間ニ於テ代理意思ノ直接ノ合致ナキニ因リ代理人ヲ以テ直ニ第三者ノ代理人トシテコトヲ得<sup>所定</sup>有<sup>改定</sup>一<sup>種</sup>ノ変例ニ屬スル<sup>所以</sup>如斯<sup>取得</sup>才<sup>法</sup>ハ明文ニ依リテ規定スルニ必要アリト認めテハ本条ヲ加ヘテ

第百八十条

本条ハ既成法典財産論中百八十五條ニ相違ス脱成法典ハ容假ノ台有ト法定ノ台有トヲ區別スルヲ以テ所有ノ意思ノ加ハルニ因リテ容假ノ台有ハ法定ノ

法典調査會

台有ニ變スト莫モ本条ハ如斯<sup>台有</sup>ノ種類ヲ認めケルニ因リ所有ノ意思ノ有無ニ因リテ台有ハ其性質ヲ變スルコトノ規定スルニ必要ナシ<sup>所</sup>有ノ意思ノ有無カ台有ノ效果ニ及ホス影響ハ取<sup>時</sup>教<sup>其他</sup>果實<sup>取得</sup>等ニ關スル規定ニ依リテ脱<sup>明</sup>カナルヲ以テ本条ニ於テ<sup>台有</sup>有<sup>カ</sup>其性質ヲ變スル時ヲ明示スルニ必要アリト認め脱<sup>成</sup>法典ノ主義ニ依リテ本条ノ規定ニ對シテ脱<sup>成</sup>法典財産論中百八十五條中三項中一<sup>号</sup>ハ所有ノ意思ヲ先<sup>知</sup>スルコトヲシ定ムトモ先<sup>知</sup>ト云フトキハ其<sup>適用</sup>限<sup>ニ</sup>止<sup>ル</sup>スルニ因リ本条ノ廣<sup>ク</sup>所有ノ意思カ

コトヲ表示スレトシ明示又ハ默示ノ表示ヲ區別セサルコトト為セリ

第四百八十七條

本條ハ占有權ニ關スル推定ノ規定ニシテ既出法典財産編第百八十六條乃至第百八十八條ヲ纏括シテ聊カ之ニ修正シタルなり  
既出法典ハ正統原ノ場合ノ規定スルノ事ニ係リ其ノ中ハ既出法典ノ規定スルノ事ニ係リ其ノ中ハ既出法典ノ規定スルノ事ニ係リ其ノ中ハ既出法典ノ規定スルノ事ニ係リ  
又既出法典ハ公然ノ占有ニ付テハ法律ノ推定ヲ其ノ而シテ其理由トスル所ハ公然ノ占有ヲ証明スルコトハ有的ノ事ニ屬スルヲ以テ極メテ容易ナレハ之レ

法典調査會

カ為メニ特ニ推定ヲ下スル必要ナシトスルニ在リ然レモ占有保護ノ必要上ヨリ一般ニ推定ヲ下スル以上ハ独リ公然ノ占有ヲ除外スル理由ナキヲ以テ本條ハ公然ノ占有ニモ法律ノ推定ヲ與フルコトト為セリ又本條第二項ニ於テハ既出法典財産編第百八十八條ヲ三項但書ニ於ケル停止ナル文字ヲ刪除セリ之レ中斷ノ證據アレハ占有ノ繼續ヲ否認スルニ充分ナルヲ以テ停止ハ之ヲ明言スル必要ナシレハナリ

第四百八十七條

本條ハ既出法典財産編第百九十二條ヲ修正シタルモノニシテ規定ノ形式ハ相似タ

又或同ノ人ノ得ル  
取ルルハ此處ニテ

決典調査會

リト第ニ其主義ニ於テハ大ニ異ナレリ既  
 即チ既成法典ハ占有ノ合併ヲ以テ本則ト  
 ニ相續人其他包括權原ノ前主ノ前主ノ  
 占有シ其性質及ヒ瑕疵ヲ以テ兼続シ只將  
 定權原ノ取得者ノ其利益ニ從ヒ自己ノ  
 占有ノミヲ主張シ又ハ前主ノ占有ヲモ併  
 セテ主張スルコトヲ得ト為セリ然ルニ本  
 業ハ占有ノ分割ヲ以テ本則トシ兼続人ハ  
 包括權原ナルト特設權原タルトシ同ハ又  
 其權原ニ從ヒ自己ノ占有ヲ前主ノ占有ト  
 分割シ又ハ之ト併合シテ主張スルコトヲ  
 得ト規定セリ既成法典財產拵才百九十二  
 条才一項ノ規定ニ依リハ前主ハ善意ニシ  
 テ後主ハ惡意ナルトキハ前主ノ善意ヲ承  
 継スルコトヲ得又前主ハ惡意ナルハ後主  
 ハ善意ナルニ拘ラス前主ノ惡意ヲ承継シ  
 テ不利益ナル結果ヲ受ケサルハカチサル  
 カ如ク甚不當ノ結果ニ陥ルヘシ故ニ本業  
 ハ後主ノ占有權兼続ハ包括權原タルト特  
 定權原タルトシ同ハ前主ノ占有ト分割  
 シ又ハ之ト併合シテ自己ノ占有ヲ主張ス  
 ルコトヲ得ト為セリ  
 然レテ前主ノ占有ト自己ノ占有ト併  
 スルヲ以テ自己ノ利益ナルト認メ之ヲ主  
 張スル以上ハ其不利益ナル點檢テ三利  
 益ナル點ノミヲ利用スルハ法律ノ許スル



カ、ナル所ヤシク一ノ事、實ク後利用セシ  
トスルニハ固ヨリ其全体ヲ引用ス、其  
不利益ノ点ノミヲ取捨ツルコトヲ許サズ  
之レハ本条第二項ニ於テ前主ノ占有ヲ主張  
セシトスル者ハ其瑕疵クモ兼認セザル  
カラスト規定スル所以ナリ

第二節 占有権ノ效力

本節ハ既成法典財産論第四章第三節ニ依  
リ占有権ノ效力ヲ規定スルモノニシテ、占  
有権ノ行使、果實ノ取得、所有権取得ノ原因、  
特別訴権ノ発生、其他占有回復ノ場合ニ於  
ケル損害賠償ノ請求及ビ之ニ本ツク留置  
権等ニ關スル条文ヲ包括セリ

法典調査會

第百八十八條 本条ハ既成法典財産論第百九  
十三條ノ字句ヲ修正シ、又其一部ヲ刪除シテ  
ルニ止マル既ニ本条ハ、法定ノ占有者假ノ占  
有等シニ區別セラル；因リ既成法典第百九  
三條ノ法定ナル文字ヲ除キ、以テ占有ノ意取  
ツ得ク、又本条ハ占有物ノ上ニ行使スル  
權利ト云フヲ以テ、學ニ占有權ニ限ルニ、アラ  
ズ、債權ノ如キ、備權ノ如キ、總テ占有物ノ上  
ニ行使スル權利ハ、及テ、證據ナリ、限ハ占有  
者ノ適法ニ之ヲ有スト、推定スルモノニシテ  
占有保護ノ要點ハ、是ニ比シ、存ス蓋シ占有者  
ハ本條ノ訴ニ於テ、常ニ被告ノ位置ニ立ツコ  
トハ此推定ニ因リ、權利行使ノ自然ノ結果ト

シテ生スル利益ニシテ特ニ明文ヲ以テ之  
ヲ指定スル必要ナシ故ニ本条ハ既成法典  
財産第百九十三条ノ末文ヲ有キタリ  
第百九十九條 本条ハ既成法典財産第百九  
十四条ヲ修正セリ既成法典ハ正権原且ツ  
善意ノ占有者ハ鞫定ヲ取得スト規定スト  
是モ本業ハ権原ノ有無ヲ問ハサルヲ以テ

正権原ナル文字ヲ除キ單ニ善意ノ占有者  
トシ其場合ヲ廢シセリ又既成法典ハ草案  
取得ノ時期及ビ方法ノ付キ細則ヲ定リト  
アル本業ハ既ニ第九十二條ニ於テ草案取  
得ニ關シ一般ノ規定ヲ設ケタルヲ以テ之  
ヲ有セリ次ニ既成法典財産第百九十四

法典調査會

第四項ハ正権原ヲ有セサル善意ノ占有  
者ハ消費シタル果實ニ屬シ利益ヲ得サリシ  
証據ヲ舉クルトキハ返還ノ責ニ任ラスト  
規定スト是モ本業ハ固ヨリ権原ノ有無ヲ  
區別セス且善意ノ占有者ハ總ニ占有物ヨ  
リ生スル草案ヲ取得レ得トスルヲ以テ自  
有保護ノ目的ニ適スルモノト認ルルニ因  
リ此点ニ於テモ修正ヲ加ヘタリ然レバ所  
有ノ意思ナキ善意ノ占有者カ草案ヲ取得  
シ得ルヤ否ヤニ付テハ其場合ニ依リテ特  
別ノ規定ニ從フヘク又本条ニ謂フ所ノ業  
實ハ占有物ヨリ生スルモノナレバ天  
然ノ草案ヲ指スニ止マリ法定ノ草案ノ如

キ權利ヨリ生スルモノハ權利行使ニ關スル規定、准占有ノ規定等ニ依リテ是レノキモノトス

既ニ法典財産論才百九十四條亦三項前段ハ占有者ハ占有物カ自己ニ屬スルコトヲ知りタルトキハ將來ニ向ヒ果實返還ノ責ニ任スヘキコトヲ規定スト雖モ本案ハ既ニ本案才一項ニ於テ善意ノ占有者ハ果實取得ノ權ヲ有スルコトヲ認ムルト共ニ若レ此者ク占有物カ自己ニ屬セザルコトヲ知りタルトキハ既ニ善意ノアリザルヲ以テ將來果實ヲ返還セザルヘカシザルコトヲ明白ナルモノトナレハ同条才三項前段

法典調査會

此是

之ヲ省テリ然レトモ占有者ハ本權ノ訴ヲ受テタル場合ニ於テ敗訴ノ判決アル迄尚ホ占有物ハ自己ニ屬スト信シタルトキハ出訴ノ時ヨリ判決ニ至ルマテ返還ノ時日ヲ経過シタルニ拘ハラズ其間ニ於ケン果實ハ占有者ニ屬ストスルト平ハ占有者任保護ニ係レテ相手方ノ保護ニ疎ナリト云ハサルヘカシズ加之若シ敗訴ノ判決ニ至ルマテ占有者ハ果實ヲ取得スルコトヲ許トスルトキハ種々ノ手続ヲ以テ殊更ニ訴訟ヲ延ハシ不肖ノ利益ヲ貪ルコトナレトモ此等ノ弊害ヲ矯メントスルニ假令善意ノ占有者リトモ本權ノ訴ニ於テ確定

ニ欺訴スルトキハ出訴ノ時ヨリ悪意ノ旨  
有者ト見做シ之レヨリ以後ノ事實返還ノ  
義務ヲ負ハシムルニ要カリト認め且如斯  
事項ハ法律ノ明文ナルニカシカレハ為シ  
能ハサルヲ以テ本案モ既出法典第百九十  
四条ヲ三項末文ノ規定ニ依ヒ本案ヲ二項  
ヲ設ケリ

第百九十一條

本条ハ既出法典財産第百九十五條字  
句ヲ修正シタルニ違キテ既出法典ニ同  
復ノ請求ヲ受ケタル物ヲ返還スルコト  
ヲ明示ストモ固ヨリ自明ノコトナレハ  
之ヲ省ケリ又本案ヲ二項ニ既出法典同条

法典調査會

第三項ヲ簡約シタルニ止マリ実質ニ於テ

異ナル所ナレ

第百九十二條

本条ニ既出法典財産第百九十八條ノ字  
句ヲ修正シタルニ違キテ既出法典ニハ  
物ヲ毀損シ又ハ價格ヲ減シタル場合ニ於  
テ其損失レタル場合ニ於テハ其損失ノ  
額ニスト認めタルコトハ本案ハ損失又ハ毀損  
ト改メタリ

第百九十三條

本条ノ規定ハ既出法典ニ於テ之ヲ即時時  
效ト称シ証據第百四十四條ノ規定スト  
モ即時效ハ時ノ経過ニ因リテ法律上ノ效

果ヲ受クハヤ規定ナレハ時ノ經過ニ關セ  
 カル即時ノ權利取得ヲ以テ時效ノ效果ニ  
 得ヌ又即時時效ナル用語ハ法律上ノ意取  
 フ為セサルコトハ既ハ本量時效ノ章ニ於  
 テ說明セリ故ニ本章ニ於テモ即時時效十  
 ル見解弁ニ其用語ノ採用マヌ又動産ノ在  
 有ニ因リテ即時ノ其所有權ヲ取得スルコ  
 トヲ得ル如キコトハ固ヨリ之ヲ在有權ノ  
 效果トシテ規定スルハ其當ラズルモノト  
 規定中ニ歸入スルハ其當ラズルモノト  
 誤トシテ何トアレハ如斯事頃ハ時ノ效果ニ關  
 係ナキモノニシテ其性質ハ全ク在有保護

法典調査會

ノ規定ニ屬スレハナリ要スルニ動産ノ如  
 キ容易ニ所有權ヲ變更スル物ニ付シハ之  
 ヲ所持スル者及ヒ才三者ノ利益保護ノ爲  
 メ完全ナル在取時ト共ニ法律ノ力ニ依  
 リテ即時ニ所有權ヲモ取得スルモノト  
 認ムルコト極メテ必要ナルヲ以テ本按モ  
 既ハ法典才百四十四條ト其精神ヲ同クス  
 ト案モ此之ヲ在有權ノ效果トシテ本節ニ  
 規定セリ又既ハ法典ハ本章ノ規定ヲ以テ一  
 種ノ規定ト認ムルハ及シ本章ハ以太利西  
 班牙瑞士等ノ法律ト同一主義ニ依リ本章  
 ヲ以テ在有權ノ直接效果トシテ所有權取  
 得ノ一方法ト認ムルモノナリ

第一百九十四條

本条ハ既成法律條文中ノ「所有」ノ字ニテ  
 句ノ修正ヲ加ヘタルニ過キズ且本条ハ一頂  
 但書及ビテ二項ハ明文ヲ要セズト認ケル  
 ；因リ之ヲ有セリ蓋シテ本条百九十二條ノ  
 ；依リ以テ有者ヲシテ即時ニ所有權ヲ取得  
 ；ルニテ有者トシテハ全ク公益上  
 ；理由ニ基クモノニシテ何レノ場合ニモ  
 此規定ヲ適用スルトキハ一方ニ於テ所有  
 權保護ノ精神ヲ謬ルニ至ルハレ即チ本条  
 ；極タル所ノ盜品又ハ遺失物ノ所有者ノ  
 ；如キハ是レ其所有物ヲ放棄スル意思ヲ  
 有レズ寧ル之ヲ保護セルトスル者ニシテ  
 所有物ヲ失フ情況ニ於テ眞、偽リハキレ  
 ノナリ然ルニ盜品遺失物ヲ占有スル者ヲ  
 ；テ及令條百九十二條ニ要件ヲ備フルモ  
 即時ニ所有權ヲ取得セシメ所有者シレシ  
 之ヲ

法典調査會

失ハシムルハ 酷ニ失スト云ハガレバカラ  
ス故ニ本案ニ於テモ既成法曲ノ精神ニ依  
リ第百九十二条ノ如キ公益ノ理由ニ基  
ツク規定ハ總テノ場合ニ適用スハキモノ  
ニ非スト認メ本案ノ規定ヲ以テ其例外ノ  
定ノ所有権保護ノ精神ヲ全フセリ

第百九十二條

本條ハ既成法曲証拠第百四十六條第一  
項ノ字句ヲ修正シタルニ止マル又同條第  
二項ハ損害賠償ノ一般原則ニ依フベキモ  
ノナレハ之ヲ首テリ

第百九十三條

本條ハ既成法曲取得條第十三條ニ當ルモ

法典調査會

ノニテ既成法曲ハ之ヲ不勅産上ノ添附  
ニ因ル所有権取得ノ方法ト爲スト雖モ如  
斯場合ハ占有ノ効果ニ因ル所有権取得ノ  
法々々ガ以テ本案ハ之ヲ本節ニ編入セリ  
又既成法曲ハ私相泄ノ魚鳩舎ノ鳩又ハ鑿  
蜂トテ之ノ如ク目的物ヲ限定ス本案ハ廢ノ  
家畜外ノ動物ト改メタルハ目的物ノ限定  
ニ其必要ナキノミナラス却テ法律適用ノ  
範圍ヲ不啻ニ縮スルモノナレハナリ其他  
既成法曲ノ時日ヲ変更シタルハ一概ノ場  
合ニ適ミテ相當ト認メ、キ期間ヲ以テ之  
ニ代ハタルニ過キス

第百九十七條

本案ハ既成法曲財産繼承百九十六条ヲ修  
正セリ既成法曲ハ占有者ノ善意タルト要  
意タルトヲ關ハシハコトヲ明ニスト雖モ  
本案ハ其必要ナシト認ムルニ因リ單ニ占  
有<sup>有</sup>爲セリ又既成法曲ハ物ノ保存ノ爲メ  
ニ費シタル金額ノモツ増<sup>増</sup>グト雖モ或必要  
ノ費用ニシテ然<sup>然</sup>モ之ヲ保存費ト称スルコ  
ト得ナレモノアル<sup>ル</sup>故ニ本案ハ保存費ノ外  
ニ必要費ナレモノヲ加ヘタリト雖モ既成  
法曲モ因ヨリ其精神ニ於テ要ナレニ非カ  
ルハ此<sup>此</sup>疑義ヲ生セシメサレカ爲メ本案  
ハ之ヲ明示スルモ

法典調査會

況ニ既成法曲ハ物ノ増價ノ爲メニ費シタ  
ル金額ノ償還請ホヲ許スト雖モ之レ雖ハ  
廣キニ失スト云ハカレバカラス何トナレ  
ハ増價ノ爲メニ費シタル金額ハ現在ノ増  
價額ヨリ大ナルトキハ回復者<sup>之</sup>カ爲  
メニ損害ヲ蒙ラサレバカラス又タ占有者  
ノ嗜好ニ因リテ隨意ニ占有物ニ費用ヲ拂  
テタル場合ニ於テ假令價格ヲ増スモ占有  
者ノ意思ニ全ク奉スル如キコトアレハナ  
リ故ニ本案ハ本案ノ項ニ於テ物ノ改良  
費其他ノ有益費ニ付テハ其價格ノ増加カ  
現存スル場合ニ限リ占有者ニ償還請<sup>求</sup>權  
ヲ與ヘタリ而シテ此場合ニ於ケル請<sup>求</sup>金  
額ノ標準ニ付テハ何カ<sup>何カ</sup>利益<sup>利益</sup>ノ如ク増價



ノ為ニ費ニタル金額ト増價額トヲ比較  
シテ其最小額ヲ償還セシムトスルヲ以テ  
容許ト認ムト雖モ此兩額ヲ定ムルコト甚  
ク困難ナルニ因リ本案ハ回復者ノ撰擇ニ  
從ヒ其費シタル金額又ハ其物ノ増價額ヲ  
償還セシムルコトヲ得トシ証明ノ責任ヲ  
回復者ニ俾シテ法律適用上ノ困難ヲ避ケ  
タリ又既成債助財産編百九十六条第一  
項ハ本案ノ規定ニ依リ自ラ明ナルヲ以テ  
文ヲ有セリ

第九十七條

本案ハ既成債助財産編百九十七條ニ即  
カ修正ヲ加ヘタリ既成債助財産編百九十七條ニ即

法典調査會

意、占有者ヲ區別シテ留置権ノ有無ヲ定  
ムト雖モ本案ハ占有物ノ保存費必至費取  
良費又ハ有益費ニ付テハ占有者ノ善意又  
ハ惡意ヲ區別スルキ理由ナク從テ其償還  
請求權ノ担保タル留置権ニ付テモ差別ヲ  
立ツル必要ナシト信スルヲ以テ苟モ回復  
者ヨリ償還ヲ受クベキ場合ニ於テハ徳ヲ  
占有物ノ上ニ留置権ヲ有スト規定セリ

第九十八條

既成債助財産編百九十七條ハ占有ノ初  
カトシテ四種ノ誤推ヲ認ムト雖モ本案ハ  
占有権ノ効果トシテ本案以下數條ニ規定  
スル所ノ三種ノ権ヲ撰擇スルコトヲ得ト

スルヲ以テ妥當ナリト認メ本条ニ於テ占  
有保護ノ本則コ示セリ即チ占有ニ對スル  
現在ノ<sup>占有</sup>侵害ニ付テハ保持ノ訴ヲ許シ<sup>未</sup>來  
ノ<sup>侵害</sup>ニ對シテハ保全ノ訴ヲ許シ<sup>過去</sup>  
ノ<sup>侵害</sup>ニ對シテハ<sup>回復</sup>ノ訴ヲ許シ而シテ保全  
ノ訴ニ依リテ<sup>取</sup>除<sup>法</sup>費ニ謂フ所ノ新工等  
發<sup>生</sup>ノ<sup>損害</sup>ヲ<sup>賠償</sup>スルヲ認メタリ

次ニ本条ノ末文ニ於テ他人ノ為メニ占有  
ヲ為ス者亦因シト規定シタルハ占有ノ訴  
ハ一概ニ急遽ヲ要スルモノニシテ訴訟法  
ニ於テモ<sup>キ</sup>統<sup>テ</sup>其他<sup>ニ</sup>在<sup>テ</sup>ハ<sup>方</sup>法<sup>ヲ</sup>要<sup>ス</sup>ル  
如キモノナレバ他人ヲシテ物ヲ占有セシ  
ムル場合ニ於テ本人ニ非ザレバ占有ノ訴  
ヲ起スコトヲ得ヌトスルトキハ<sup>實際</sup>ノ不  
便甚シカ<sup>ル</sup>ハ<sup>ノ</sup>占有保護ノ<sup>精神</sup>ヲ<sup>損</sup>傷<sup>ス</sup>

法典調査會

ニ故ニ本条ニ於テ他人ノ為メニ占有物ヲ  
所持スル者ニモ占有ノ訴ヲ提起スルコトヲ  
許シ以テ占有保護ノ趣旨ヲ全フセリ

第二十九條

本条ハ既取債物取除法條ニ百條ヲ修正セ  
リ既取債物ハ同篇第百四條ニ於テ回收  
訴訟ノ<sup>目</sup>録<sup>行</sup>實<sup>迫</sup>スル<sup>訴</sup>術ニ因ル<sup>ル</sup>占有<sup>ノ</sup>奪取  
ノ場合ニ限リ保持訴訟ハ其他ノ奪取ノ場  
合ニ之ヲ行フコトヲ<sup>請</sup>スルモノニシテ<sup>其</sup>範  
圍<sup>ニ</sup>ハ<sup>廣</sup>ク<sup>互</sup>ニ<sup>混</sup>同<sup>ス</sup>ル<sup>コ</sup>ト<sup>ヲ</sup>アリ故ニ本  
條<sup>ニ</sup>ハ<sup>長</sup>有<sup>奪</sup>取<sup>ノ</sup>場合<sup>ハ</sup>復<sup>テ</sup>回收<sup>ノ</sup>訴ヲ許

ニ保持、訴ハ未タ占有ヲ失ハズシテ妨害  
ヲ受ケル場合ノミニ限リ以テ其區域ヲ明  
ニセリ

第二百一十一條

本條ハ既成法典財産編第ニ百一一條及ヒ第  
ニ百一三條ノ規定ヲ併合シテ之ニ修正ヲ加  
ヘタリ既成法典ノ如ク危害ノ原因ヲ列擧  
スルハ徒ニ煩雜ナルノミナラズ之ヲ盡ス  
コト能ハザルヲ以テ本案ハ廣ク危害ノ虞  
アルトキト爲セリ又既成法典ハ新工告發  
及ヒ急害告發ノ訴權ハ共ニ不動産ノ占有  
者ニ屬スト現定スト雖モ本案ハ如新限定  
スル理由ナシト認ムルニ因リ動産ノ占有

法典調査會

者タルト不動産ノ占有者タルトテ問ハズ  
本條ノ訴ヲ提起スルコトヲ許セリ其他既  
成法典同編第ニ百一三條及ヒ損害賠償  
ニ對スル担保トシテ保証人ヲ立テシムル  
トニ限ルト雖モ之亦其方格ヲ制限スル必  
要ナキヲ以テ本案ハ廣ク擔保ヲ請求スル  
コトヲ得ト改メタリ

第二百一十二條

本條ハ既成法典動産編第ニ百一四條ヲ修正  
セリ既成法典ハ占有ノ奪取ハ暴行脅迫又  
ハ詐術ニ原因スル場合ニ限ルト雖モ本案  
ハ廣ク占有ノ奪取セラシムルトナト改メ  
タルハ之ヲ限定スル理由ナシトナリス

既成法典同条第一項ノ但書ハ甚ク危殆ニ  
 シテセツク言ヌルハ累行罰迫スル詐術ニ  
 因リテ占有ヲ奪取セラレタル者又此等ノ如キ  
 手段ニ依リテ占有ヲ回復スルモ可ナリト  
 シテ如キ解濟ヲ生スルニ致シ本条ハ之ヲ  
 削除シテ一旦占有ヲ奪取セラレタル者ハ  
 必ス府ノ方法ニ依リテ之ヲ取得スルコ  
 トヲ明ニセリ本条第一項ハ既成法典取産  
 編第一節四條第一項ニ郵カ修正ヲ加ヘク  
 リ既成法典同項但書ニ特定承継人ハ不  
 法ノ所為ニ關與セタルトキニ限リ例外ヲ  
 設クト雖モ本案ハ如斯制限ハ却テ不當ニ  
 シテ承継人カ一概ニ惡意ナリトキハ本

法典調査會

條第一項ノ詐ヲ變ケサルベカラカレモノ  
 ト認ムルニ因リ廣ク停業ノ事實ヲ知りタ  
 ル者ハ占有回復ノ放リ對抗セラレルモノ  
 ト為セリ

第二百三條

本條第一項ハ既成法典財産編第一節六條  
 第一項ノ文字ヲ改メタルノモ又第二項ハ  
 既成法典同條第二項第三項ニ相當スルモ  
 ノニシテ郵カセテ修正セリ即チ既成法典  
 ハ新工券発ノ裁權ハ工券ノ發成セカレ間  
 ハ之ヲ許スト雖モ新工券ヲ要スル工券ニシ  
 テ在府者カ之ニ因リテ危懼ヲ受クハ其虞  
 アルヲ知りナカラ一年以上モ監視シテ占

有保全ノ訴ヲ起サバハ以テ其最早此訴ノ  
提起ヲ許ス必要ナリ工事ノ没却ニタル場  
合ト同一ニ取扱フヲ以テ妥當ト認ムルニ  
因リ本案第二項但書ニ依リテ新工着工後  
一年ヲ経過シシルトキハ有保全ノ訴ヲ  
許サズト改メタリ又既成法典同条第二項  
但書ハ占有保持ノ訴ノ場合ヲ規定スルモ  
ノニシテ本案第一項ノ規定ニ依リテ明カ  
ナルヲ以テ之ヲ有セリ

第二 百 四 條

占有ノ訴ト本権ノ訴ト、關係ニ付テ既成  
法典ノ條ハ所ノ主義ハ本権ノ訴ハ占有ノ  
訴ヲ包含スルモノニシテ此兩訴法ハ併行

法典調査會

スルコトヲ得ス又占有ノ訴ハ概テ皆迅速  
ヲ要スルモノナリハ故テ手續上ノ理由ヨ  
リ兩訴法、併合ヲ許サズトスルモノニ  
シテ財產權第一七七條乃至第二一九條及  
ニ第二十二條ハ此主義ニ依リテ規定セ  
ラレタリ本案ハ全ク之ニ要テハ主義ヲ取  
ルモノニシテ本権ノ訴ト占有ノ訴トハ相  
互排斥シテ互ニ相妨ガルコトナシトス蓋  
シ占有ヲ以テ一種ノ獨立セル物權ト認ムル  
以上ノ文ニ明スル訴ハ故テ上ニ於テモ一  
個獨立ノ訴トシテ之ヲ取扱フニ依リテ故  
律ノ保護ヲ全フスルモノト云フニ故ニ  
本案第一項ハ本権ノ訴ハ占有ノ訴ト互ニ

相妨ゲザルコトヲ明示シ本権ノ存ノ根拠  
又ハ其判決ハ右有ノ訴ノ根拠スハ其判決  
ヲ妨グルコトナク本権ノ訴ヲ取下グルモ  
右有ノ訴ノ根拠ニ影響ヲ及ボスコトナシ  
トセリ

本条第三項ハ既成債權助産編第百七条  
第二項ト同一ニシテ本条第一項ノ自然ノ  
結果トシテ特ニ之ヲ明云ハルニ必要ナキカ  
如ヒト猶モ其ハ本権審理ノ事實ニ因リテ  
右有ノ訴ヲ判決スル虞ナシトセヌ又本権  
ノ訴ノ判決アレハ右有ノ訴ハ根拠スルコ  
トヲ得ザルモノノ如ク廢ハシムルコトナ  
シトセヌ此等ノ疑惑ヲ解キ且本権ノ訴ト

法典調査會

右有ノ訴トハ互ニ成立セル訴ナリト認ムル  
主義ヲ明カニセシカガ為メ本項ヲ設ケタリ  
中トニ決セリ

第三節

占有ノ消滅

本節ハ占有ノ消滅ノ原因ヲ規定スルモノ  
ニシテ既成債權第百七条第四章第節ニ  
相當ノ別ニ説明ヲ必要セヌ只本室ニ  
於テハ消滅ナル説ヲ用ヒ喪失ト云ハワ  
ルハ既ニ占有アリテ權利ト認ムル以上  
ハ法律ノ規定ニ因リテ權利ハ消滅スル  
モノナレハ從來ノ同例ニ從ヒ之ヲ變更

第二百〇四條

地ノミ

既成債權  
ノ訴ニ由リテ  
相妨トナリ  
得  
之アリ

既民法典財産編第百十三條ハ占有喪失ノ原因ヲ列擧ス下雖モ其必要ヤキノミナラス列擧法ノ通律トシテ既病ノ具アリテ以テ本條ハ其<sup>學</sup>修正<sup>學</sup>加<sup>法</sup>有<sup>則</sup>ノミヲ示セリ又本條但書ハ既民法典同條第<sup>三</sup>條但書ト其趣旨同一ニ即チ占有者<sup>カ</sup>他人ノ為メニ占有ヲ侵奪セラレタル場合ヲ豫想シテ本則ニ對スル例外ヲ設ケルモノニシテ占有者<sup>カ</sup>實際其所持<sup>ク</sup>失フモ法律ノ規定ニ依リテ占有ハ繼續スト認メラルルモノナリ蓋シ本條ハ占有者タルト所有者タルトヲ問ハス侵奪セラレタル占有物<sup>ヲ</sup>私力ヲ以テ回復スルコトヲ禁ヒタルニ因リ若

法典調査會

し所持ヲ棄タルルト共ニ占有権モ消滅ストスルトキハ占有者ニ取リテ酷ニ失スト云ハサルベカラズ故ニ占有者<sup>ノ</sup>自助ヲ禁スル<sup>ル</sup>也<sup>ト</sup>本條但書ニ依リテ保護ヲ與ヘ占有者<sup>カ</sup>回復ノ故<sup>ヲ</sup>起<sup>シ</sup>タルトキハ占有権ハ未ダ消滅セスト現做スモノナリ

第二百〇九條

本條ハ現來ノ既民法典ニ<sup>此</sup>變<sup>更</sup>ト雖モ既ニ代理人ニ依リテ占有権ヲ<sup>現</sup>得<sup>ル</sup>コトヲ認めハル上ハス代理人ニ依リテ占有<sup>シ</sup>場<sup>合</sup>ニ於ケル占有権ノ消滅ヲ現定スル必要アリト認め多<sup>ク</sup>數<sup>ノ</sup>立法例ニ依リテ本條ヲ設ケタリ又本條第二項モ占有保護

既民法典多國ノ總ノ占有権取<sup>ル</sup>要件<sup>ヲ</sup>自然ニ生ズルモノナリ<sup>ト</sup>別<sup>ニ</sup>說明<sup>シ</sup>テ<sup>モ</sup>其<sup>ノ</sup>旨<sup>ハ</sup>一<sup>ト</sup>

ノ為ニ設クルモノニシテ代理人カ死亡  
シ又ハ無能カトナリタルトキハ代理権ハ  
消滅スト雖モ本人ノ為メニ返有権ハ消滅  
セサルコトヲ認ムルモノナリ

第四節 准占有

權利ノ占有ハ實際ニ多ク存在スル事實  
ニシテ之ニ關シテ特ニ規定ヲ設クル必  
要アリト雖モ本章ノ規定ハ物權ノ一々  
ハ占有權ニ關スルモノナシハ權利ノ占  
有ニ關スル規定ハ其例レノ節ニモ編入  
スルコト能ハサルニ因リ特ニ本節ヲ設  
ケ准占有ノ名目ヲ以テ之ヲ規定セリ而  
シテ之ヲ權利占有ト稱セカリニハ准占

法典調査會

有、第ハ既、羅馬法以來ノ用例ニシテ  
其意義既ニ明白ナリ

第二百七條

既成法律典則條第百ハ十九條ハ權利ノ實  
行ニ依リテ其占有ヲ取得シ得ルコトヲ認  
ムト雖モ本章ハ既ニ條百ハ十條ニ於テ占  
有權ノ目的物ハ有体物ナルヲ明示セリ蓋  
シテ占有保護ノ法律ハ物ノ所持ヲ保護スル  
ニ始マリ於テ一種ノ物權トシテ保護ヲ受  
クルニ至リタルモノナリト雖モ學理上其  
性質ヲ極ムルトキハ占有權ハ總テ權利ノ  
現實ノ行使ニシテ占有ヲ總テ權利ノ占有  
ト稱スルコトヲ得トシ然レ既ニ占有權